独自の「カーストモデル」から世界情勢を分析――北朝鮮はカーストの進化に逆らえない。「金正日の引退」が現実的選択だ

話題の未来学者が大胆予言！「2020年日中と統一朝鮮の『儒教国連合』が結成される」

Confucio

イラン革命やベルリンの壁崩壊といった世界史のパラダイム転換点を的確に予測してきたローレンス・トーブ氏。日本人にはあまり馴染みはないが、その大胆な予測が海外メディアで話題になっている。また日本でもフランス現代思想などで注目される思想家・内田樹氏（神戸女学院大学教授）が最新著書『知に働けば蔵が建つ』で「（トーブ氏の）未来予測につよく惹かれる」と紹介しており、実にユニークな存在だ。歴史を包括的に捉える「マクロ経済学」では、未来学者アルビン・トフラーらと肩を並べるほどの壮大な世界史を展開している。

そんなトーブ氏が今、アジアに熱い視線を送っている。近い将来、日本、中国に統一朝鮮を加えた3国が地域ブロック「儒教国連合」（Confucio）（「儒教」を意味するConfucismからの造語）を結成し、米国や欧州を凌ぐ存在となって世界に君臨していくというのだ。

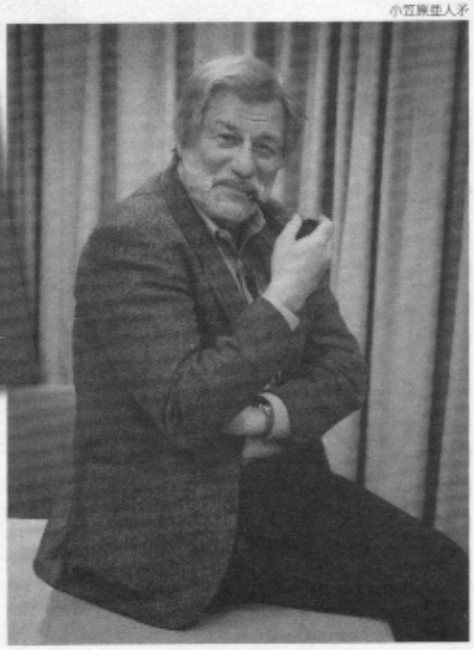
近著『The Spiritual Imperative — Sex, Age, and the Last Caste（精神と宗教の時代――性と年齢と最後のカースト）』で描かれた大胆な予測とはいかなるものか。（取材・構成／出井康博）

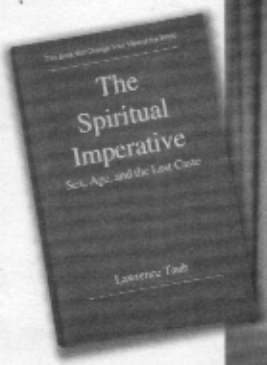
＊

私は今後2～3年で朝鮮半島に統一国家が生まれるだろうと見ている。そして2020～2025年頃には、日本、中国（その頃には中国と台湾が統一されている可能性も高い）、統一朝鮮がまとまって儒教国連合が誕生する。極東版EU（欧州連合）と言える存在で、経済のみならず政治、軍事面でも世界最強の連合体になるはずだ。

米国が唯一の超大国であり続ける現在、突拍子もない話だと思われるかもしれない。しかも日本と中韓両国の関係は、小泉首相の靖國参拝問題もあって最悪の状況にある。また、北朝鮮の金正日が簡単に政権を放棄するかどうか。だが、歴史の「ビッグピクチャー」から捉えれば、儒教国連合の誕生と繁栄は必然の流れなのである。

小笠原豊人撮





未来学者
ローレンス・トーブ
Lawrence TAUB

カーストモデルでいえばアメリカの時代も終わり

私は人類の歴史を考察するとき、1975年から一貫して「カーストモデル」という考え方を用いてきた。元来「カースト」とは人々の階級を表わすインド・ヒンドゥー教の概念である。カーストには「僧侶（広義な意味で宗教的・精神的な指導者）」「戦士」「商人」「労働者」という4つがあり、それぞれが順に時代を支配した後、再び宗教的・精神的カーストの時代に戻ると教えられている。これを実際の時代に当てはめたのがカーストモデルである（次ページ図）。

まず、人類誕生から紀元前2000年頃までは「宗教・精神カースト」の時代だった。人間は部族単位で暮らし、土着信仰などを司る宗教者が支配していた。続いて17世紀初めまでが「戦士カースト」の時代である。「戦い」が最重要事項となる一方、国家という概念が生まれ、武力を背景にして国王が君臨した。この時代、最も栄えたのがスペインとポルトガルである。

17世紀半ばになると、「商人カースト」が戦士カーストを凌いでいく。オランダに始まってフランス、ドイツなど欧州各国でブルジョア革命が起き、日本でも明治維新で体制が変わった。権力の源は武力から「資本」へと移行した。ピークを迎えるのは20世紀半ばの米国である。

[PROFILE] 1936年アメリカ、ニュージャージー生まれ。ニューヨーク大学、ソルボンヌ大学で歴史学、政治学、フランス語を学ぶ。ここ20年ほどは日本に滞在し、研究のかたわらフリーランスの語学教師・翻訳家として活動。10か国語を操り、アメリカ、フランス、デンマーク、イスラエル、インド、ネパール、ドイツ、オーストラリアなどを行き来している。

そして20世紀後半から、商人カーストから「労働者カースト」へ時代は移った。「金こそすべて」という商人カーストの価値観に対し、労働者カーストには仕事の「質」や「協調」「バランス」を重視する特徴がある。この時代、急速に勃興するのが日本だ。市場経済と政府規制のバランスを取る「日本型チームワーク資本主義」は国家経済のあり方として時代にマッチした。企業でも簡単にレイオフを行なう米国型よりは、トヨタのような日本型経営が理想的である。

日中韓はいくら政治家同士の関係が悪くても、一昨年から中国が日本にとって最大の貿易相手国となった事実が示すように、経済面における協力関係は3国間で着実に強まっていくばかりだ。

しかも3国には、もともと共通点が数多い。地理的に近く、歴史的にも深いつながりがある。「漢字」を共有するなど文化的にも似通っている。

さらには儒教の伝統が強く、国民性は勤勉だ。労働対価にも増して労働自体に関心があるように映る。こうした価値観こそ労働者カースト時代の象徴なのである。同じく儒教思想を持つ北朝鮮を加えた儒教国連合が誕生すれば、21世紀半ばまで世界を牽引していくことになるだろう。

さらに言えば、その後は再び宗教・精神カーストの時代がやってくる。世界の中心は、インド、イラン、イスラエル、アラビア半島、北アフリカなど「宗教ベルト地域」へと移っていくはずだ。

ハンチントン「文明の衝突」への疑問

もう少しカーストモデルの説明を続けると、各カーストの時代は（1）初期（2）革命・発展（3）ピークの3段階に分けられる。例えば、共産主義国家は労働者カースト時代の革命段階における形態だ。革命は貧しい国で起きるのが特徴で、西側諸国は革命を経ず発展段階からピーク段階へと進化した。カーストモデルの理論に従えば、共産主義国家はカーストの進化過程で消える運命にあった。だからこそ私が（30年以上前に）ベルリンの壁崩壊（共産主義国家崩壊のドミノ倒し）を予期できたのだ。一方で私は、宗教・精神カーストが育つにつれ、前述の宗教ベルト地域で初期から革命段階へ向かう動きがあると考えた。そして実際に起きたのがイラン革命だったのである。

各時代の支配カーストは図で示したように微妙にオーバーラップする。前の時代が頂点にある頃、次の時代を担うカーストが育ち、やがて支配カーストとなっていく。

現代社会の分析として、米国で2001年に「9・11」同時多発テロが起きて以降、歴史学者サミュエル・ハンチントンの唱える「文明の衝突」*（1996年発表）が世界を解説するモデルとして注目されている。しかし、見方が浅いと言わざるをえない。イスラムと西欧文明は決して対立するものではないのだ。

アルカイダを始めとするイスラム原理主義とは、宗教・精神カーストの革命段階の現象である。次世代カーストに属するとはいえ、将来、イスラム原理主義が支配的な地位を得るわけではない。労働者カーストの革命段階に存在した共産主義国家と同じだ。

イスラム原理主義は米国やイスラエルを「敵」としているが、実際にはイスラム圏内で権力を握ろうとしているだけだ。つまり、アルカイダ現象の本質は同じ宗教・精神カースト内の争いと言える。テロの恐怖はしばらく続くだろう。しかし、パレスチナのハマスやエジプトのムスリム同胞団といった原理主義組織がそうだったように、政治参加の機会を得れば暴力性は消え失せるはずである。それに伴って、宗教・精神カーストの時代もピーク段階へと進む。

米露が接近し世界は「7つのブロック」へ

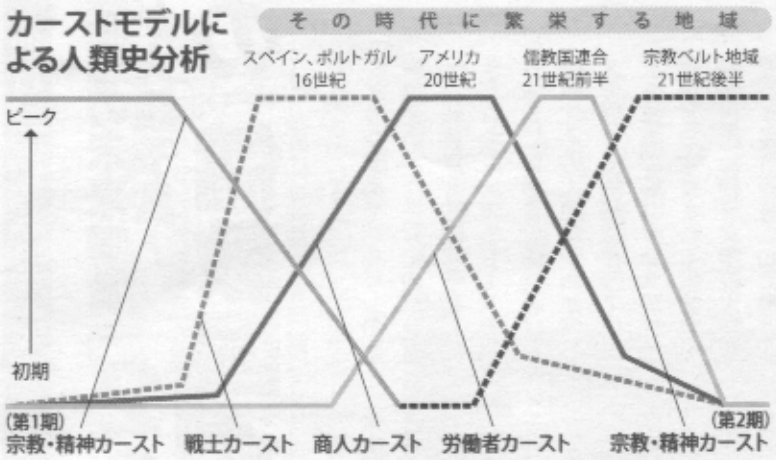
次に、儒教国連合が誕生するまでのプロセスについて話を進めてみたい。

商人カースト時代の帝国主義は、バランスや連帯を重視する労働者カーストとは相容れない。そこで新たな国家間の関係として「ブロック（連合）」という形態が生まれた。

まず1958年、米国、ソ連と対抗すべくEEC（欧州経済共同体）が発足し、後にEUへと発展していった。こうしたブロックが将来、世界に7つ作られると私は見ている（左上図）。それを後押しするのが儒教国連合の誕生だ。

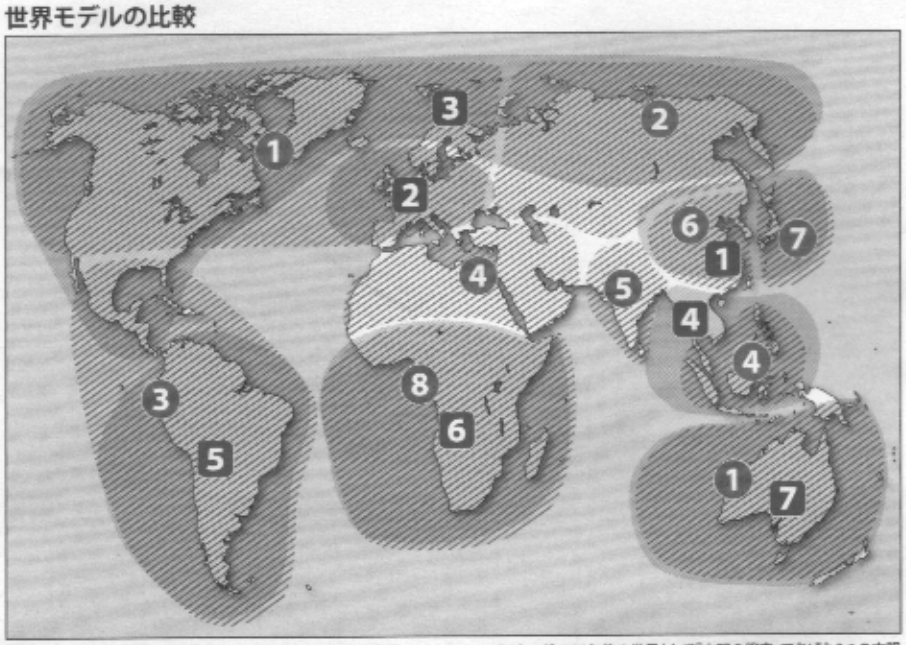
北朝鮮を包含するというハードルはいっけん高そうに映る。しかし、世界を見渡しても労働者カーストの革命段階にある国は北朝鮮とキューバのみとなった。中国は「共産主義」の看板こそ捨てていないが、改革開放路線で実態はピーク段階の国へと進化している。北朝鮮がカーストの進化に逆らって、いつまでも革命段階の国であり続けることは不可能である。韓国との統一によってこそ、ピーク段階

カーストモデルによる人類史分析



※…『文明の衝突』は、冷戦後の世界のパラダイムを示し、結果的にアメリカとイスラム原理主義の衝突（9・11テロ）を予見した。ハンチントンは、冷戦後に民主主義を土台にした「普遍的な文明」が世界に生まれるとした考えに反論し、冷戦後の世界には8つの文明が存在し、それによる亀裂、対立、特に「西欧対非西欧」の構造の出現を主張した。

世界モデルの比較



■ トープ氏のモデル。地域ブロック化した2030年頃の世界。❶儒教国連合、❷EU、❸北極圏連合、❹ASEAN、❺ラテン・アメリカ、❻アフリカ、❼オセアニア

▨ ハンチントンが1990年後の世界として『文明の衝突』であげた8つの文明。❶西欧文明、❷東方正教文明、❸ラテン・アメリカ文明、❹イスラム文明、❺ヒンドゥー文明、❻中国文明、❼日本文明、❽アフリカ文明

へと進むことができるのだ。

こうした状況を北朝鮮指導層は理解しつつ、自らの身の安全を案じているようだ。彼らの将来を予測するのは私の役割ではないが、統一には金正日の「引退」が最も現実的ではなかろうか。中国が亡命を受け入れる可能性もある。

中国も変化を続けるはずだ。真の経済大国を目指そうとすれば、自由な政治体制は必要不可欠となる。そして民主化された国は、他国の脅威ではない。そうなれば台湾との統一が現実味を帯びてくる。

以上のプロセスを経ながら日中韓は急速に連携を深めていく。余りに楽観的だと思われるならば、欧州に目を向けてもらいたい。フランスとドイツ、スペインとポルトガルなど、かつて険悪だった2国間関係はいくらでもある。だが、今では各国とも仲良くEUで手を取り合っている。国家の関係においては、いつ何時「昨日の敵が今日の友」となっても不思議はないのだ。

アジアではマレーシアのマハティール前首相のように、「ASEAN（東南アジア諸国連合）＋3」＝東アジア共同体構想（右図）をアジア版EUにと提案する考えもある。日中韓も「プラス3」として首脳会議に加わっているが、東アジアでまとまるのは難しいのではないか。多数の加盟国にあって中国が大国として突出してしまうし、日中韓が儒教圏で括れる一方、ASEAN諸国には多様な宗教、価値観が混在する。

いずれにせよ、儒教国連合の形成が加盟国に与える恩恵は計り知れない。経済面はもちろん、政治面でも大きな発言権を得られる。さらには、軍事面でも日中は互いの脅威を取り除くことができるのだ。

問題は日本と強固な同盟関係にある米国の反応だ。日本の独自路線を阻止するとの見方もあるが、少なくとも私はそうは思わない。英国のEU参加を後押ししたように、日本の儒教国連合入りに対しても同様に賢明な選択をすべきだろう。日米関係は悪化せず、米英関係と同じく将来的にも緊密であり続けるはずだ。

米国としては将来、中国が超大国になることが何より怖い。日本が儒教圏に加われば、日本を通じて中国を牽制することも可能になるのである。

その一方、米国は儒教国連合とEUに対抗すべくロシアと接近していく。ロシアのEU加盟も噂されるが、他のメンバーが許さないだろう。EUにとってロシアは大国すぎる。むしろ私は、米ロとカナダ、メキシコ、スカンジナビア諸国で第3の極「北極圏連合（Polario）」（「北極」を意味するPolarからの造語）が結成される可能性を指摘したい。

最後に儒教国連合への道を切り開く日本の指導者とは誰なのか。一般的に小泉首相は中国、韓国との関係を悪化させた張本人とみなされている。しかし、言われているほど小泉首相が中韓で評判が悪いと私は思わない。政治とはあくまで実利的なものである。小泉首相が北朝鮮に二度の訪問を果たした事実は大きい。後世から見れば、儒教国連合誕生に向け第一歩を踏み出した指導者として評価されているかもしれない。